

ふかんど通信

谷津干潟友の会

〒275 習志野市谷津3-25-11

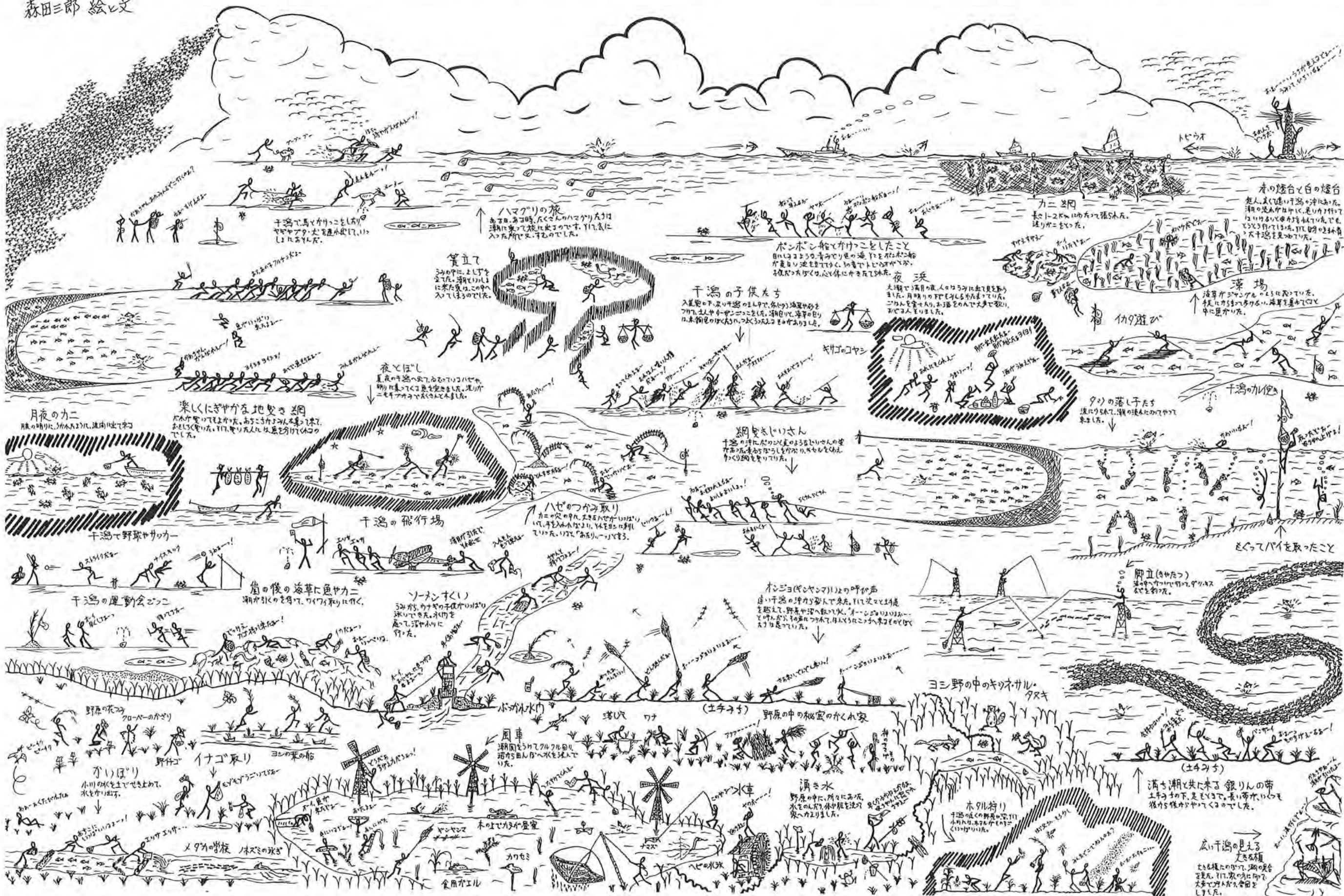
TEL. 0474-51-5044

Vol. 1 昭和62年1月20日発行

干潟の想い

— ありし日の谷津干潟と赤銅色の子供たち —

森田三郎 絵文



このイストは、どうして生まれたか

誰なれば
黙しておるやと戸をたたく
地下に埋もれし干潟のなかが
「あの赤銅色の子供たちはどこへ行った?
潮の匂いを忘れたか? 広くて豊かな、青み
どりの海はどこへ行ってしまったのか?」
東京湾には、もうよたたび、赤銅色の子供
たちが躍動する姿は見られないのか。

子供たちに必要なのは、干潟である。決して干潟の定義や解説や理論ではない。位置づけや、その考え方もない。なぜなら、子供たちにとって、前者は在るもの、後者は、大人が大人の頭で作り、歌えるものだから。前者は、キャッシュ、金そのもの。後者はそれを担保とした手形であり、小切手であり、紙幣である。かつて干潟と子供たちとの間

に立ち入るものは何もなかった。いま、子供たちから、その紙幣を出された時、わたしたち大人は、何ほどのものを出せるだろうか。

我が胸に
のぼる人道雄渾の
燃え湧き上からん泉あり

幾千のシギ、チドリが、せまい谷津干潟の上を飛び舞う。夕陽をうけて、紙吹雪のようだ。ここには、往時の面影はない。追われ追われた彼らは、このせまい所に押し込められたのだ。その有様は、干潟の想いの呼び水である。その時ほど、彼らを守ろう。谷津干潟を残そうと、強く、深く思ったことはない。私は子供のころの、干潟の想い出の中で日

なたほっこをする人間ではない。「谷津干潟のために、何が出来ないかよりも、何が出来るかを考えてきた。どうして出来ないかよりも、どのようにしたら出来るかが大事だ。出来ないことを数え立てるより、出来ることをさがしてきた」この語は、そんな中から生まれた。生きながら埋められた、幾億万の干潟の仲間と、少年のものがたりです。

森田三郎

ふかんど通信

谷津干潟友の会
〒275 習志野市谷津3-25-11
TEL. 0474-51-5044

この貴重な自然を明日の子供達へ 森田三郎



潟スキーでクリーン作戦中の森田三郎 昭和61年8月

夏月 日 新 聞 1986年(昭和61年)7月28日

天声人語

もし、故郷の干潟がヘドロやゴミに埋まって死滅しつづつあるのを久しぶりに見た場合、自分だったらまず何をするかと考える。泥にまみれながらゴミを拾うだろうか。たぶん嘆きつづつあきらめてしまうのではないかと。干潟の習志野市に住む森田三郎さんは、あきらめなかった。東京湾の広大な埋め立て地の中に、四角い池のような形で取り残された干潟があった。日比谷公園の二倍ほどの面積の干潟は、悪臭を放ち、生き物の姿はなかった。幼いころ共に暮らした干潟のうめき声を、森田さんはきいた。

▼森田流の運動は単純明快だった。どろどろの汚泥に身を投じ、黙々とゴミを拾うことだ。空きかんや古自転車を持ち、腐敗したナマゴミの山に挑む。古畳や冷蔵庫や建築用の廃材をロープにくくりつけて岸にあげる。拾っても拾ってもゴミは捨てられたが、拾いまくれれば道が開ける、と自分にいきかせた▼最初は気恥ずかしかった、恥ずかしい

と、故郷の干潟がヘドロやゴミに埋まって死滅しつづつあるのを久しぶりに見た場合、自分だったらまず何をするかと考える。泥にまみれながらゴミを拾うだろうか。たぶん嘆きつづつあきらめてしまうのではないかと。干潟の習志野市に住む森田三郎さんは、あきらめなかった。東京湾の広大な埋め立て地の中に、四角い池のような形で取り残された干潟があった。日比谷公園の二倍ほどの面積の干潟は、悪臭を放ち、生き物の姿はなかった。幼いころ共に暮らした干潟のうめき声を、森田さんはきいた。

▼森田流の運動は単純明快だった。どろどろの汚泥に身を投じ、黙々とゴミを拾うことだ。空きかんや古自転車を持ち、腐敗したナマゴミの山に挑む。古畳や冷蔵庫や建築用の廃材をロープにくくりつけて岸にあげる。拾っても拾ってもゴミは捨てられたが、拾いまくれれば道が開ける、と自分にいきかせた▼最初は気恥ずかしかった、恥ずかしい

楽園の子供達

月夜の力二

絵と文 森田三郎

月の光の美しい晩、数えきれない程たくさんワタリガニが波間にたたく。

「月夜の力二」この美しい言葉に大人達は、カニが浮かれて出て来るのだと言った。だが、ぼくの月夜の力二は違っていた。

学校から帰ると、カパンをほうりながら、干潟へ行った。お日さまが、キラキラ照りつける砂浜は、子供達の遊び場。

「オーイ、早く来いよおー」なんと、ガキ大将のマーちゃんももう、干潟へ来ていた。ハダシに焼けつくような砂の感触を、快く感じながら走った。二人、三人と、あつちからも、こつちからも友達が集まって来た。遠々と続く砂浜を、どう使って遊ぼうと自由なのだ。かけっこ、鬼ごっこ、土人ごっこ等に夢中になった。

土人ごっこのとき、体の小さいぼくは、神へのささげものにされるのがいやだった。でも、ガキ大将のマーちゃんにさからうわけにはいかないのだ。なぜって？

つぎから遊びにいられてもらえないから。ぼくは、じつと歯をくいしばってがまんした。

子供達が遊びつかれて、家路につく頃、干潟にも涼しい風が吹きぬける。お日さまが、かけ足で西の空へ沈むと、あたりは一面紺色のカーテンをおろしたようなヤミに包まれる。遠くで波の音が、タツプ、タツプとする他は何も聞えない。まもなく、空は一面キラキラ輝く星でいっぱいになる。

十三夜の月が静かに、やさしい光をふりそそぐ。

ぼくは昼間、くやしかったことも忘れて、夜空を見上げていた。十五夜の月よりも、可能性を秘めた十三夜の月を、ぼくは好きだ。やさしさと、思いやりがある十三夜の月。

足を波に洗われながらすわっていると遠くに小舟が見えた。一つ、二つ、はつきりとはわからない。母から聞いた話を思い出した。「なあ、サブ、月がだんだん大きくなつて、砂浜を明るく照らすと



な、そんな夜は、たくさんカニが、ああ、今夜の月はなんときれいだ、エエ、うかれて海へ出て来るんだとお。

「なんて、うかれんのおー」もしかして、月夜の力二は、うかれてんではない。ほんとうは、さびしいんだ。だから、月夜の晩に出て来るんだ。きつと、そうだ。ぼくは、かつてにそう思った。波間にたたくカニを思つて、いつまでも座つていた。

森田三郎の略歴

昭和二〇年七月七日 千葉県船橋市に生まれる。

船橋市立宮本小学校、同宮本中学校卒業。家が貧しかったため高校進学をあきらめて、日立製作所習志野工場技能者養成所に入る。昭和三八年卒業。

勉強したくてたまらず、日立製作所をやめ、自ら働きながら(新聞店員)、県立船橋高等学校定時制に通学。昭和四二年卒業。

東洋大学文学部英米文学科入学。通関士試験に合格。卒業後、船橋市立宮本小学校教員として勤務。昭和四九年退職。我が故郷の海(谷津干潟保護運動)開始。

谷津干潟クリーン作戦に突入。

谷津干潟環境美化委員会設立。

谷津干潟環境美化委員会設立。

国(大蔵省・建設省・環境庁)・千葉県(企業庁・習志野市・京成電鉄・道路公団)・鉄建公団・住宅公団を相手に強力な運動を展開。

昭和五六年 谷津干潟のために、職業・住所を習志野市に移すことを決意。

昭和五八年 朝日新聞の「新人国記」に採り上げられる。

昭和五九年 旧谷津遊園のバラ園と緑地の保存運動を住民と共に展開。

昭和五九年 谷津干潟を含む周辺の自然公園化決まる。

昭和五九年 NHK教育テレビ「東京湾を考える」で全国放映。

昭和五九年 PH出版部および講談社出版の児童文学書のモデル。

昭和六一年 朝日新聞の「天声人語」に採り上げられる。

昭和六一年 テレビ朝日「久米宏のニュースステーション」で全国放映。

このイラストは1部分を縮小したものです。実物(80cm×31cm)をご希望の方は住所・氏名・年令・電話番号をハガキにご記入の上お送り下さい。無料にて差し上げます。〒275 習志野市谷津3-25-11 森田三郎 宛

赤銅色の子供達よ、健やかに育て！ここに居るのは皆んな友達だ。イラスト 森田三郎

守ろう残そう 谷津干潟自然教育園

皆んなで作ろう！



ゴミーひろい愛

谷津干潟

クリーン作戦

むかし、横浜の本牧岬から木更津の富津岬まで、東京湾岸には一面の干潟が広がっていました。そこはアサリやハマグリのお宝庫であり、ハゼやカレイやボラやスズキの産卵場所でした。いま、そこは埋め立てられ、工場や住宅になり、私たちが住んでいます。

人間のために、生きながら埋められた無数の生命たちはるか大昔から、南から北へ北から南へ渡る途中で、羽を休め、食べ物をとる場所を失った鳥たち。とはいっても、いま、ここに住むよりしかない人間の私たちが、せめて、わずかな恩返しをしたい。感謝の気持ちをあらわしたい。それが、「谷津干潟クリーン作戦」です。

毎月、第一、第三日曜日の午後一時ごろ、谷津干潟南側(湾岸道路側)のアシ小屋(あずまや・いそしぎ)の前集合。ゴム手袋とゴム長靴があればよいのですが、なくても可。

第三火曜日は、谷津三丁目(北側)で、午前十時半から主婦の方を中心に続けています。もちろん主婦でない方も大歓迎。

やりたいときに、やりたいひとが、やりたいように、それが私たちのやり方です。とにかく、まず、やってみること。

あなたも、森田三郎と、ゴミ、ひろい愛、いかがですか。

ふかんど通信

谷津干潟友の会

〒275
習志野市谷津3-25-11
TEL. 0474-51-5044

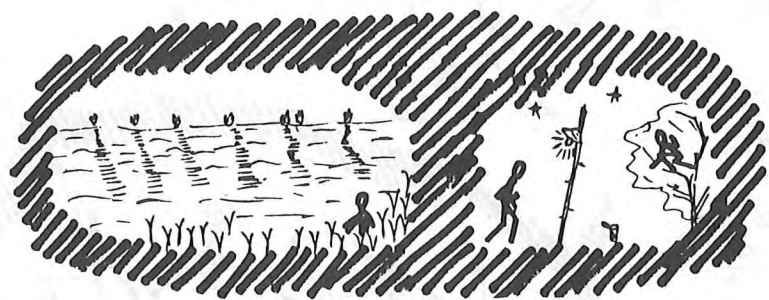
楽園の子供達 2

絵と文 森田三郎

いさり火とかあちちゃんの背中

「だいたいまあー」。学校から帰ったほくは、カバンをほつり出した。でも、「おかえりなさい」という田の声は聞かれなかった。「シーン」と、しずまりかえった家の中は、幼いほくの心に、いしれぬ寂しさを湧き上がらせた。台所の戸棚の戸を、ガタピシとあけた。何もなかった。もう一度探してみた。やはり、「おやつ」らしいものは、見あたらなかった。おひつのフタをあけた。白いご飯があつた。ほくは、大きなニギリをつくった。そして、味噌を無造作につかむと、ニギリにぬつた。まるで、赤ちゃんの頭くらいの大ささだった。それを、味噌と米粒だらけの両手で持ち、バツバツフッほおばり、家までてほくは干潟へと、足を向けた。

「ウンメエー」こんなオニギリで、も、育ち盛りのほくにも、うまかつたのである。干潟では、真黒に日焼けした仲間が待っていた。「オー、サブ早く来いよあー」カキ大将のマーちゃん、手まねきをしていた。ほくは、手についたご飯粒を、口へ口へなめながらかけていった。「オー、土人こつこしよう」ほくは内心いやだったけれど、カキ大将のマーちゃんにさからうと、遊びに入れてもらえないのだ。干潟で遊ぶほくたちの影が、まるでお化けのように、長くなりだす頃、お日様は、かけ足で海に沈んでゆく。



か、家へ帰る途中の木に登った。そのとき、海へ続く返道を田が仕事から帰って来るのが、目に入った。暗い、だらだら坂の道。電灯の明りの中を、田が歩いてゆく。いつもは、「かあちゃん」とかけてゆくのに、その日は、ただ見つめていた……。田はすこしうつ向きかげんで、何かをじつと考えているようであった。背中をまるめた田の後姿。「かあちゃん、何考えてんのかなあ……。仕事で疲れたのかなあ……」。田の背中は、なんだか寂しそうで可愛想なきがした。子ども心にも、そこに、もう一人のほくの「知らない」「いつもの田」とは違つ田がいた。そしたら、こんなことをしているほくが、悪い子に思えた。涙が後から後からこみ上げてきた。ひとり海辺へ行き、泣きながら真黒い海にチラチラ映る「いさり火」を見ていた。「悲しかったなあ、あんな時」波が、タツプタツプ打ち寄せ、シギガ、ツビーツビーと鳴いていた。

現代版「青の洞門」……森田三郎の一念。

「新人国記'83」

京月日 築斤 辰巳
(昭和58年) 10月1日

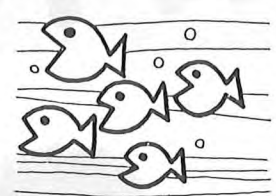
千葉県

開発の進行は地元さまざまな波紋をもたらし、習志野市にある珍しい野鳥の楽園・谷津干潟のドラマもその一つ。死にひんしていた干潟がよみがえったのは、地元の商店員森田三郎(三郎)の現代版「青の洞門」の一念による。



すべてと鼻の船橋市の海岸べりで育った森田は、干潟の海が遊び相手だった。潮が引けばカニや貝を手づかみにし、風車や水車を見えるのどかな風景に少年の夢を膨らませた。が、長じて市川市へ越し、九年前、久しぶりに見た干潟に目を疑う。あたり一面が埋め立てられ、わずかな国有地分三十餘ほどがぼっかり残るだけ。しかも、古材や粗大ゴミ、生ゴミが山を成し、ゴミのための腐臭を放っていた。「胸が痛んで涙が出ました。干潟に自分が出てやることは何だろう」と自問し、ゴミを思い立った。当時の仕事は新聞配達で、日中は自由。雨の日も風の日もバイクで干潟へ通り、身一つでゴミの山と格闘を始める。狂人扱いの中で、二年、三年……汚泥を手にし過ぎ、両手の指紋が消えてしまったことも。が、その献身が人を打つ。近くの主婦たちがゴミだらけに加わり、無理解った臭や国も干潟保護へ腰を上げる。六年越しにさらったゴミは、土のう数万袋、大型トラック数十台分。昔の砂地が顔を出し、カニやゴカイが戻った干潟に、シーズンの今、一万羽近い渡り鳥の群れが羽を休めている。(敬称略)

町の中に海がある



谷津干潟と
周辺の公園化で
習志野市を日本一の
文教住宅都市に!

習志野市が持つ宝物——それが谷津干潟だと私たちは思います。全国に都市公園はいくつもあります。中には池や沼をもつ公園もあるでしょう。でも、町の中に海がある公園なんて、ひとつもありません。谷津干潟は海なんです。もし谷津干潟とその周辺が公園として整備されれば、日本全国どこにもない「住宅地の中の海の公園」が誕生します。想像してみてください。住宅地の、緑の樹々やバラ園や、遊歩道に囲まれた海——。一日のある時間は満々と水をたたえ、またある時間は一面のカニやトビハゼが跳ねまわる。四季を問わず群れ遊ぶ多数の鳥たち。

自然の生態系の微妙なバランスの上に立つ干潟は、作るうとしても、なかなかできるものではありません。それがいま私たちの目の前にあるのです。埋め立ててしまえばただの土地。それが住宅地になろうと、工場用地になろうと、全国どこにもあるものです。谷津干潟を含む東京湾岸は習志野市の宝物です。東京湾の汚染をくい止めれば、野鳥や生物の観察を楽しみ、釣りや潮干狩りをし、海水浴もできるシーサイド・タウンを作ることが、きっとできるので。町の中に海がある習志野市を、ほんとうに住むかいのある町にしたい。それが私たちの夢なのです。

絵と文
森田三郎

干潟の思い出

干潟の子供たち

入道雲の下、広い干潟のまん中で体じょう海草や砂をつけて、土をトザンごこをした。潮の匂いと海草の匂いは、赤銅色のぼたりに、つよくなった。ものがありました。

月夜のカニ

月夜の明りに、うかれたように、波向に出て来る。

夜浜

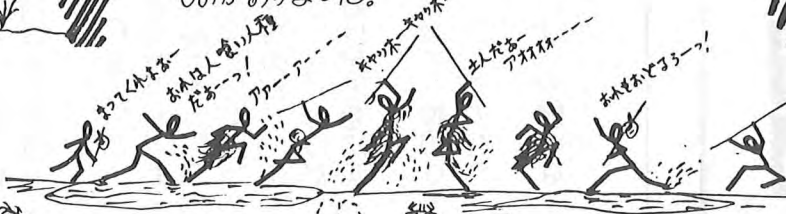
大潮で満月の夜、入々はうみに出て貝を採りました。月明りの下でもみんなかたまっていた。ごはんを食ったり、お酒をのんで大声で歌い、おどる人もいました。

ホタル掬い

干潟の近くの野原や沼を流す小川には、ホタルがものすごくいっぱいいた。

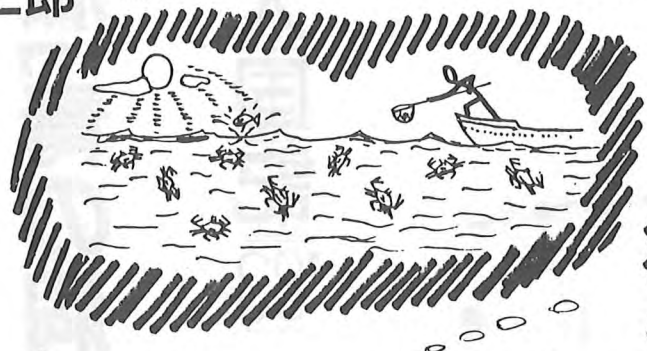


干潟の飛行場



夜とぼし

夏、夜の干潟へ出て、ねむっているハゼや明りに集まってくる魚を突きました。渡りがも手づかみでたくさんとれました。

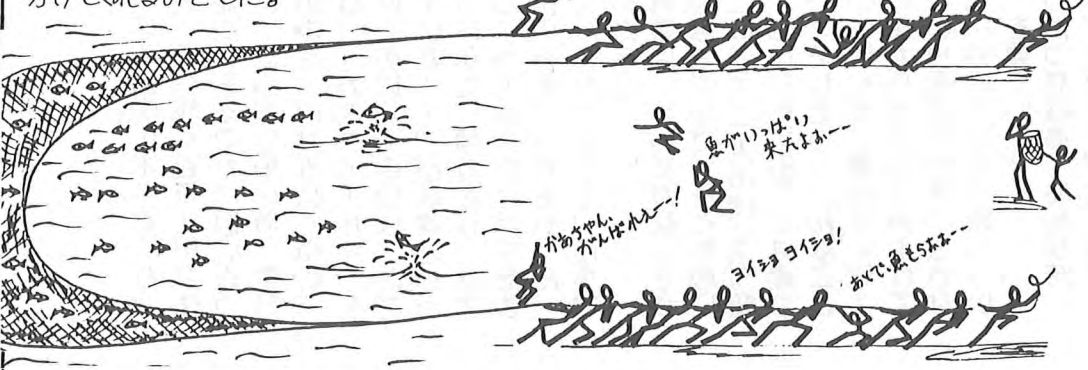


ポンポン船とかけっこをしたこと

目にしみるような青みどり色の海。そこをポンポン船が真白い波を立ててゆく。その音でトビウオがとろろ子供だったぼくは、心と体にかきたてられた。

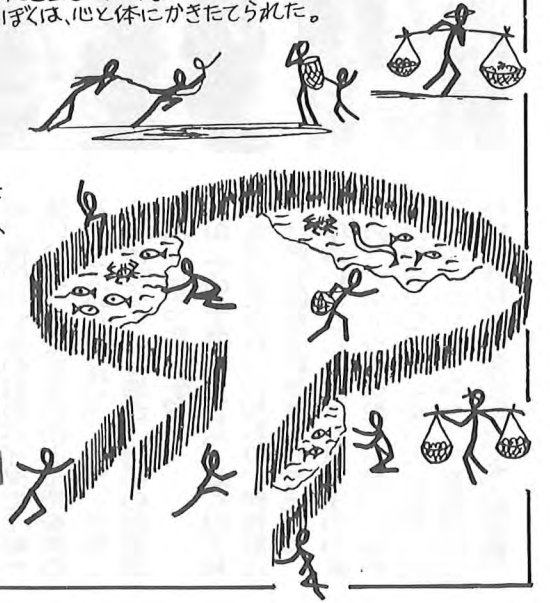
楽しくにぎやかな地曳き糸網

だれが曳いてもよかった。あっちこちらからおもしろく曳いた。そして、曳いた人には魚を分けてくれるのでした。



簀立て

うみの中に、よしずを立てた。潮といっしょに来た魚は、この中へ入ってしまうのでした。



楽園の子供達

絵と文 森田三郎

ソーメンすくい

ソーメンとは、ウナギの子供だ。きつと、その体がソーメンにそっくりなので、そんな名前がつけられたのだろう。

長さは10〜15cm位。色はネズミ色だった。沼や田んぼ、野原の間を流れて来た小川が、干潟に出てくるところ。その流れとは逆の方向に頭を向けて、ヒョコヒョコと泳いでいた。

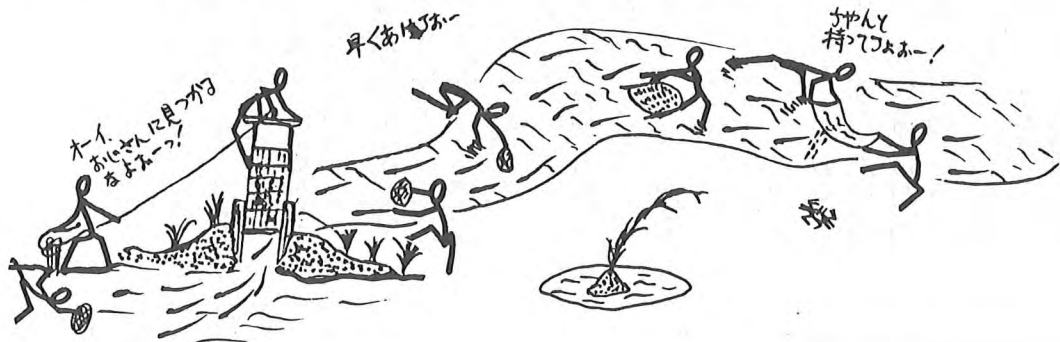
ゆっくりしか前に進まない。後から後からやって来た。海の方からやって来た彼らは、小川をさかのぼって、ブッカレ水門をくぐり抜け、湧き水や葦や、水草の所を通って、沼や田んぼに散ってゆく。

体つきも動きかたも、ほんとうにソーメンや、冷麦みたいだった。ぼくたちは、家からザルや手ぬぐいなどを持ち出して来て、泳い

でいるソーメンをひっきりなしにすくいとった。両手をおわんのように入れて、水の中に入れれば、その中へソーメンが入って来るのだ。手の、水の中でピョコピョコ泳ぎまわる長さ5cm位のソーメン。それをジューツと見つめていた、夏の日の子供時代を、私は、ニイニイゼミの声を聞くと思い出す。

でも、ソーメンは、つかまえるとはみなすぐ死んでしまうのであった。バケツや、長くつの中で、死んで白く固くなった沢山のソーメンたちを見て、ぼくは子供ころにも、何が、自分がいけないことをした人間、罪の思いをもったものでした。

ただ、つかまえるのが面白かった。とは言え、草むらにソーメンを捨てる時は、そんな自分に空しさで残酷さを感じた。母にもよく



「三郎、お前、ムダな殺生するなよ」と言われた。あの頃、昭和三十年頃、谷津干潟のまわりの小川には、なぜあんなにもソーメンたちがいたのだろうか？ ソーメンは、海のどんなところで生れ、大きくなったのだろうか？ そして又なぜ、みんなして小川をさかのぼって来たのだろうか？ その時も、今もわからない。

ただ一つ、はっきりしていることは、埋め立てや開発と共に、いち早くその姿を消してしまったことである。海はよごされ、かつての小川は下水溝となってしまうた現在、あのソーメンの大群は、再び見たことはない。そして、「ソーメン」という名前も忘れられてしまった。

ブッカレ水門は、ソーメンすくいの「もってこい」のところ。それを、干潟の子供たちは知っていた。キラキラ光る水につかかって、赤銅色の子供たちは、目をサラのようにしてソーメンをすくった。

谷津干潟友の会

〒275 習志野市谷津3-25-11
TEL. 0474-51-5044

サンデー毎日

昭和59年11月18日号に掲載

ゴミ地獄から谷津干潟を 生き返らせた男のたった一人の闘い

森田さんのやってきたこと、そしてこれからも続けるであろうことは、そんなところの生身の人間では、出来ないことだ。腰までスプスプ沈み込む、臭い泥にまみれてのゴミ拾い。誰もが顔をそむけるきたない「仕事」を森田さんは10年にわたって、黙々と一人でやってきた。

昭和49年、森田さんは小さい頃の遊び場だった谷津干潟を久々に訪れて、愕然とした。野菜クズ、建材、毛布、冷蔵庫、オートバイと、ありとあらゆるゴミが干潟を覆っていた。ブーンと鼻をつく臭気。貝やカニ、カメやウナギそしてトビ魚に野鳥と子供の時は自然の宝庫だった干潟は、今や見る影

もなく、死の干潟と化していた。ハゼはどうした。カニはどこへいった。そして、楽しかった子供のころの思い出はどこへいった。「生き物がかわいそうだ」森田さんの一日も欠けることのない闘争が、その時から始まった。新聞販売店に勤めていた森田さんは、朝刊と夕刊配達の間空いた

時間をすべてゴミ拾いに費やした。広さ45ヘクタールの広大な干潟。拾っても拾ってもきりがなかった。潮が毎日、ゴミを運んでくる。拾っているすぐ横で、近くに住んでいる人が、ポンポン、ゴミを捨てていく。注意すれば「お宅はこの市の人ではないでしょ。言う権利はないでしょ」と、逆に文句を言われる始末だった。

護岸に集めたゴミも、誰も持っていくてくれなかった。市、県、国とも、縄張り根性から、知らぬ存せぬを決め込んだ。思い余って、ゴミの山に火をつけ、火事と見間違えて消防車が駆けつけたこともあった。

孤独な闘いのうちに、少しずつ協力が現れてきた。有志の「グリーン作戦」も展開され、当局も協力的になった。「疲れてやる気がなくても、とにかく体だけは干潟にもっていかうと自分に言い聞かせてやってきた。ゴミを集めて運ぶルートも出来たし、これからは闘いながらやることもなくなるでしょう」

臭気もなくなり、昔のように、とまではいかないまでも、カニが八サミを振るなど生物も帰ってきた。干潟を見ながら、森田さんは遠くを見る目つきになるのである。



ふかんど通信

谷津干潟クリーン作戦のシンボルマークとトレーナーが出来ました

クリーン作戦の輪を広げて行きたいと思えます。あなたもゴミ、ひろい愛、いかがですか。

森田三郎



「谷津干潟」の森田三郎さんを描く

本田さん(元習志野在住) 入選



写真右から本田さん、審査員の橋田寿賀子さん、森田三郎さん

女性ヒューマン・ドキュメンタリー

第八回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞カネボウスペシャルの表彰式が十一日、東京・帝国ホテルで行われ、入選に輝いた「甦(よみがえ)れ谷津干潟」の作者の桶川市若宮一の八の二四の二〇四、県立伊奈総合学

園高校家庭科講師本田カヨ子さん(四五)に賞状と賞牌(しよはい)、賞金が贈られた。作品は、本田さんが昨年七月まで五年余り住んだ千葉県習志野市で、ミニコミ紙の記者をしていた時に知り合った谷津干潟愛護研究会会長の森

田三郎さんが、ゴミとヘドロで死滅しかかった谷津干潟に再び現在のような自然を取り戻すまでの十二年間の孤独な闘いを描いたもの。

三冊目の童話の出版を間近に控えた本田さんは、干潟の復活に全青春をかけた森田さんの生きざま、情熱をテーマにしよつと考えたこともあるが、童話では描ききれないと思ひ直し、仕事のかたわら半年がかりで書き上げ、初応募で入選を果たした。

本田さんは「文章力がないので入選など無理と思っていました。が、とてもうれしい。この作品から森田さんの干潟にかけた情熱を読み取り、自然保護について考えてもらえたらと思います。今回の入選は森田さんへの拍手と考えていた。良かったです」と話していた。

森田三郎後援会

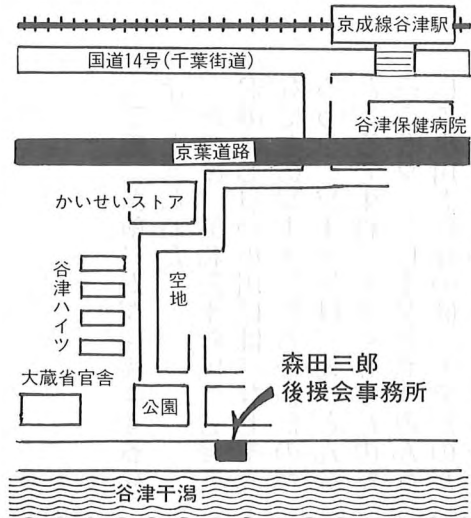
事務所開設のご案内

森田三郎後援会では、この度の選挙に「出たい人」より「出したい人」を出すためにがんばっています。そこで人並に事務所を開き一層の結束を固めたいと存じます。お気軽にご来所の上激励を賜りますようお願い申し上げます。

四月五日午前十時より開設いたします。

後援会事務所

習志野市谷津三の二五の十一
電話〇四七四一五二一五〇四四



谷津干潟友の会

〒275 習志野市谷津3-25-11
TEL. 0474-51-5044

ふかんど通信

毎日新聞 1984年(昭和59年)9月12日

楽園の子供達

4

文 森田三郎

それは小さな大福だった。ぼくはその頃、まだ六、七才くらいだった。小学校前だから、ほかの子は「さんすう」の勉強をしたり、ひらがなで自分の名前を書いたりしていた。ぼくはまるでだめだった。字も読めないし、書けないし、見ても何だかぜんぜんわからなかった。

母はよく、「三郎、おまえいつまでも犬っころみてえに遊んでじゃねえどお。いいかあ、この前もくめ七のおばさんから、「おたくのさぶちゃんを野放しにしないでくれ」って言われてんだかなあ」と言っていた。

そんなある日のことだった。近所の農家のおばさんが、夕方、遊んでいたぼくたちに、「おまんじゅう(大福)をあげるから家の中に集まん」と言った。そんな中、ぼくのカギ大将、大好きなマーちゃんもいた。いくらぞうきんで拭いても、手足は汚くて、顔も黒く、服は力ギ裂きだらけ。

くたちは、大福なんてめったに食べられなかった。だから、とつてもごちそうで、うれしくて、ぼくは、少しずつ、長くかけて食べた。食べてから、手についた白い粉を服で拭いていたら、「おやあ、マーちゃん、どうしたの、どうして食べないの」というおばさんの声でした。みんな食べていたと思っていたので、ぼくは「あれえ……？」と思ってマーちゃんを見た。

思いつめてみるみたかった。ほんと真下の、ひざの上の量を見るぐらいで、動かないでいた。おばさんもみんなも、しばらく黙っていた。

ぼつべたからも涙が伝ってきて、手、ひざ、畳に落ちていた。くちびるを固く結び、肩と手をふん張り、目は下を見つめたまま動かなかった。

谷津干潟を清掃する森田さん

小六の道徳副読本に

習志野市の野島の楽園、谷津干潟の清掃活動を続けている谷津干潟愛護研究会の森田三郎会長(三)の活動ぶりが春から県内の小学校六年用の道徳の副読本の一部で紹介される。「自然保護の大切さ

や自分の信じる道を一人黙々と歩むその生き様を児童たちに知ってほしい」と出版社と執筆者はその意義を話している。



清掃する森田さん(この写真は新聞に掲載されたものではありません。)

森田さんの活動が掲載されるのは学習研究社(本社・東京大田区)発行の「みんなのどうとく」の小学六年用の後半の千葉県版教材三編のうちの一編。同社の副読本が来春から高学年用もB5判からA4判に大型化する機会に内容も改訂されることになり、千葉市立弁天小の八木下陽子教諭(三)に執筆依頼があった。八木下教諭は「新聞などで森田さんが腰まで泥につかって清掃活動を続けているのを知り、以前から道徳の時間に子供たちに、その生き方について考えさせようと思っていた。たまたま執筆の話があったので、書いてみた」と話している。

内容は、谷津干潟が東京湾の埋め立てなど開発攻勢の中で、わずかに残った大切な自然でもあることを説明。さらに森田さんが干潟の自然を守るため続けている清掃活動を詳しく紹介している。

「森田さんの仕事は、まず、そのゴミをひろふ事から始まった。腰まで泥につかりながら、一日も休まずゴミの山にくわをうちこみ、ゴミをほりおこし、大きな袋の中につめこむ。多い日は、袋に十個ほどにもなる」

森田さんは言う。「春になって、干潟の泥に、アシのみずみずしい芽がそとでてくるのを見る楽しみ。アシの芽が伸びるといっしょに、カニの穴が、日に日にふえていく楽しみ……。そんな楽しみがたくさんあるからゴミをひろふ仕事が続けられるのさ」

そして最後に「一人黙々とゴミひろいをおこなう森田さんの気持ちについて考えてみましょう。私たちの住んでいる地域の環境を守るため私たちにできる事はどんな事なのか考えてみましょう」と結んでいる。八木下教諭は「大声で叫びまくる人の主張ばかりがまかりとおったり、派手な活動にはかり目がいくいまの世の中で、森田さんのような生き方について子供たちと一緒に考えたい」と話している。

(※モデルが現生者で現在活動中という理由で掲載されませんでした。ふかんど通信編集部)



森繁久弥さんから 激励の手紙

俳優の森繁久弥さん(谷津干潟愛護研究会名誉会員)ご夫妻は、谷津干潟に來られて、森田さんのクリーン作戦を知り、以後永い間あたたかい声援を送り続けてくれています。



この手紙は森繁久弥さんの諒承を得て掲載いたしました。

秋の野原の草花、千鳥の鳴き声、そして、森繁久弥さんからの激励の手紙。森田三郎様へ。お元気ですか。おかげで、秋の野原が綺麗です。森繁久弥さんからの激励の手紙を拝見しました。ありがとうございます。

いつもお元気ですか。秋の野原、綺麗ですね。森繁久弥さんからの激励の手紙を拝見しました。ありがとうございます。おかげで、秋の野原が綺麗です。森繁久弥さんからの激励の手紙を拝見しました。ありがとうございます。

上の写真は、谷津干潟南側の草原で撮影したものです。四月、この草原は、日一日と草の緑が濃くなり、アシの芽が少しずつと伸びていきます。五月になると、あざやかなアシの緑におおわれて、やがてカルガモが巣を作り、ヒナが育っていきます。昨年も六羽のヒナが可愛い姿を見せてくれました。

この約三ヘクタールのアシ原は「自然に」残ったわけではありません。自然に「残った」わけではなく、谷津干潟そのものが埋立てられ、湾岸道路は干潟を埋立てた真ん中を通る予定でした。

その計画を変更させ、干潟を守ったのは、谷津・袖ヶ浦・幕張・若松など、周辺住民運動の力でした。しかし、埋立てが進行するに従い、住民運動も下火になり、干潟はゴミの山になりました。そのゴミの山に一人で挑んだのが森田三郎さんでした。

森田さんは、干潟の保存のためには、周辺に緑地を残すことが絶対に必要だと考えました。そして、千葉県企業庁と激しく対立しながら、干潟の流木をロープで引き上げ、ハンマーを振って、ベンチやテーブル、アシで屋根をふいた小屋を作っていました。昭和五十四年までにその数は約二百五十にもなり、体をはっての激闘の末、ついに県企業庁と県自然保護課は、自然保護団体に対し、約三ヘクタールの緑地保存を約束したのでした。

さらに、津田沼高校脇の市道に沿って、幅七メートル、延長三百五十メートルにわたる緑地も確保しました。

また、競馬場脇の谷津三丁目から湾岸道路までの簡易歩道も、歩行者の安全確保のため、県企業庁及び日本道路公園との強力な交渉の末に設置されたものです。

いま緑地には森田さんの独力でメダカの池が作られ、子供たちを喜ばせています。将来、谷津干潟と周辺の自然公園化が確定すれば、野鳥観察舎や森や池もできるでしょう。それも、皆さんの心のこもった応援しだいのことなのです。

楽園の子供達

5

絵と文 森田三郎

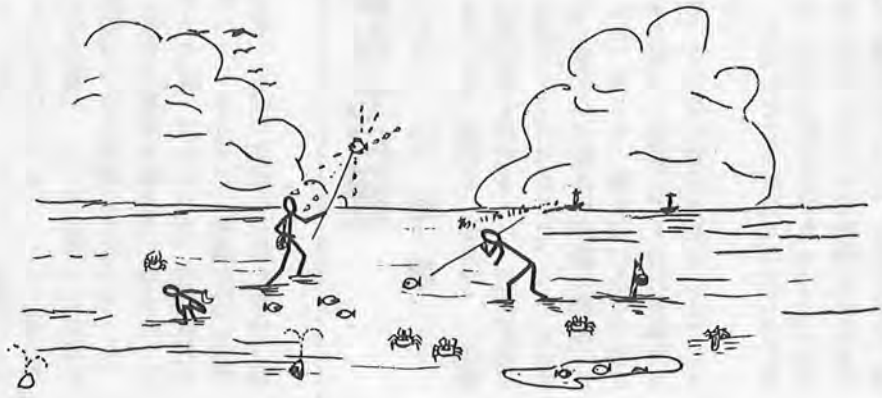
干潟のカレイつき

初夏、干潟からの呼び声である生暖い海風が、やわらかく吹く頃。ほくの家の庭と、わらぶき屋根の大半は、燃えるような緑の木の葉におおわれた。

その木立の中に、ひときわ大きい榎があった。ほくは、榎が大好きだった。榎に登れば、広く大きな干潟が見えた。「干潟が、ほくを呼んでいる。心がおどるのだ。ほくは、吸いつけられるように、土手道を越え、干潟へ走った。

干潟には、どこもかしこも、小さなカレイたちが、いつばい泳いでいた。くろぶしからふくらはぎくらいの色、浅いミオ（溝）や、潮溜りの中は、カレイだらけだった。

バシャバシャと、水音を立てて歩いて行く。すると、砂の色をしたやつが、てんでに、かっつな方へ走って行った。カレイたちは、泳ぎ出すとき、バツと砂を舞い上げ、スーとすべる



よつにして泳ぐ。そしてまた、止まったときにも、ヒレを二回ヒラヒラと動かして、砂を舞い上げる。すると、砂が落ちてきて、カレイの体をすっほりと包みかくしてくる。だから、砂地との見分けがつかなくなってしまうのだ。シーと見つめると、カレイの方も、そこから目だけ出して、ギョギョと、ほくを見ていた。

ほくたちは、自転車のスポークや、太い針金をとがらせ、それを竹の棒にゆわえつけて、モリを作った。

ザルを肩からつるし、生暖い潮風に吹かれながら干潟の潮の中を歩いて行った。そあと、足音をしのばせて近づいても、そこかしこに、砂が舞い上がる。砂の舞い上がった所に、そあと近づき、水面に顔をくつつけるようにした。そして、カレイを見つけたら、そこを目掛けて、「ツン」と、モリをついた。

ヒラヒラと、手ごたえがあつて、水面に持ち上げると、水滴がまわりに飛び散った。生きがよいので、ほくの顔にも、潮水がかかり、ひゃっこかた。手の平の半分くらいのものから、十玉くらいの赤ん坊のカレイもいた。こんなにかわいらしいカレイの、小さな体へ、鋭いモリをつきさして、ほくは、なんだか、かわいそうになった。そんなことをしなくても、カレイはたくさんとれた。

ただ潮水の中に立っているだけでいいのだ。「コチヨコチヨ」と、足の裏の土ふまずの所に、次々と、カレイたちがもへりこんできた。足の回りにさえ、ツンツンと、ぶつかってくるのだ。

潮だまりの中に、手ごたえだけでよい。手のくほみの中に、「コチヨコチヨ」と、はいつてくる。それをキュツとつかんで、かたづけはから、ホイッとザルに入れていった。

夏の埋め立て地の華

コアジサシ

繁殖の 海原ごときコロニーを

我は歩かん 舟となり

森田三郎

誰が信ずるだろうか。今から十
二年前、この茜浜、芝園の全体に
三千以上の巣と一万个程の卵の繁
殖地があったとは……。

コアジサシやシロチドリは、荒涼たる砂漠のような、貝ガラと砂の所に、おわん形のくぼ地を掘り、



卵を抱くコアジサシ



コアジサシのヒナ



コアジサシの卵

貝ガラをしいて卵を産み、ヒナにかえす。次から次へと……。
コアジサシはニュージーランドやオーストラリアから、シロチドリやコチドリはシベリアやカナダ、アラスカから渡って来る。つまりここ習志野の埋め立て地に、極北と極南の渡り鳥が集結して営巣し、そしてまた北へ、南へ帰ってゆく。毎年毎年、これを繰り返してきた。最盛時には、東京の荒川河口から千葉市の花見川河口までコロニー（集団営巣地）が広がっていた。しかし、今では、そのほとんどが消滅してしまい、茜浜のごく一部に、ほんの名残りをとどめているにすぎない。巣の数も、かつての百分の一に減ってしまった。

コアジサシは、夏鳥のチャンピオンだ。そのサーベルのようなくちばし、頭に黒いベレー帽、そして白くてスマートな白い翼……。魚をとるときは、まっさかさまに音を立てて水に突っ込む。巣に人が近づくと、急降下して「ウンチ爆弾」を落としてゆく。

コアジサシ……。彼らは、夏を、埋め立て地を、そして習志野を代表する鳥である。

ふかんど通信

発行所 谷津干潟友の会
習志野市谷津3-25-11
〒275 ☎0474-51-5044
編集人 大滝俊隆

選挙ってオモシロイね

秋津三丁目長塚進吉

勝ったから言えることなのだが、選挙がこんなに面白いものとは思像もしなかった。自分たちが推している候補者が、市会議員として他の誰よりもふさわしく、訴えていることが正しいという自信があり、しかも、選挙運動を始めた日からしっかりと手応えがあった。これで面白くないはずがない。

それにしても、おそろしいほどの素人選挙だった。四月十九日の告示の日の朝、八時半を過ぎても選挙カーの看板が完成せず、立候補の手続きに選挙へ行ったら、候補者四十七人のドン尻だった。警察へ車の許可証をもらいに行くと、「なんだ、軽だ」とカルくあしらわれた（ような気がした）。なにせ走行距離二十五万キロ、タイヤはつるつる、ボディは錆だらけというしろものだ。正直のところ、候補者名が規則どおり書かれていくかどうかよりも、警察が「こんなボロ車で走っちゃいかん」と言いはしなかつた心配だった。

無事に合格して、「さあ、事務所まで、谷津干潟の森田三郎です」とやりながら帰ろうぜ」とマイクのスイッチを入れたら、音が出ない。これにはあわてた。事務所へ帰って出陣式をやるうにも、マイクなしでは氣勢があがらない。

三郷市から応援に駆けつけてくれた菅原幸子市議とその仲間が、オタオタしている我々を尻目に、「ハンドマイクを持って歩いて回ろう」と、素早く行動してくれた。その間に電気屋さんが来て、「シガレット・ライターが錆びてらあ」で一件落着。のっけから縁起でもないスタートだったが、一回りしてきた菅原さんのひと言が我々を勇気づけた。「すごい反応よ、絶対当選するわよ」。

私にとって貴重な七日間

谷津五丁目 佐藤 康子

選挙といえば、投票すること。ずっとそう考えていた主婦の私が選挙の手伝いをするなんて、家族や友人がおどろいたのも無理はありません。

でも、干潟で泥まみれで働く森田さんを見ていて、少しでも役に立てばと、ほんの軽い気持ちから参加したので。周りも皆、私と同じ主婦や会社員で選挙は初めての人がばかり。マイクを持ったのだから初めてです。オドオドと話し始めたものの、知らず知らず声を張り上げて、あとはもう夢中でした。名前を間違えたり、言葉につまって沈黙が続いたり、と、さぞ聞き苦しかったことでしょう。

一週間はあっという間に過ぎてい

本当にすごい手応えだった。朝の駅立ちでも、駆け寄って握手を求め人がかなりいた（わるいけど、市長候補の三上さんより多かったと思う）。袖ヶ浦団地では花束をくれた人がいた。選挙カーが「窓からお手を振っての御声援ありがとうございます」なんです。なんていうのは、たいい嘘だということだが、我々の場合は嘘じゃなかった。そして誰よりも熱心な支持者は、子供たちだった。



選挙は初めてという人ばかりだったが、タレントは揃っていた。印刷物のデザイナー、看板や塗装の専門家、印刷屋さん、ワープロのプロ、なによりも貴重な、全く無私のボランティア精神で活動してくれた主婦のみなさん。「わたし、演説なんかしたことないから・・・」と尻込みする主婦が、マイクを持つと見事に説得力のある演説をするのだった。「選挙の勝敗を決めるのは女だ」というのは、ほんとうだ。毎日会社へ行ってしまふ男は、地域に関心も持たず、人のつながりも持たない。選

きました。団地で、街角で、一生懸命演説する森田さんに、思わず拍手を送りたくまりました。ペラペラから、窓からの暖かい声援に感激しました。そして、車を追いかけて来て手を振って応援してくれた子供たちに、どんなに励まされたことでしょう。

私のしたことはほんの少しでしたが、得たものはとてもたくさんありました。これからは市政にも大きく目を開きましょう。子供たちに、森田さんがしてきたことを、多くの人が支持してくれていたのだと話してあげましょう。

長いようで短かった七日間は私にとって、とても貴重な経験でした。

選挙運動をする休みも取りにくい。市議員のほとんどが自営業者なのも当然だ。サラリーマンは政治の世界から除け者にされている。我々勤め人がもっと地域の生活に関心を持つ一方、女性がどンドン市議会や、県議会に進出していい。

今度、習志野市で森田さんがトツプ当選したことは、とても大きな意味があると思う。それは、カネがなくとも、既成の政治家にコネがなくとも、この習志野市では、ちゃんとした人間が市議会に出られるということを実証したのだ。金権・千葉という文句は聞きあきた。

これからは、森田さんも大変だ。しかし、彼ならばきっと新しいタイプの、市民に顔を向けた市議員になるだろう。谷津干潟クリーン作戦が、我々にとってボランティア活動であると同時に遊びであり仲間の出会うの場であるように、市議員

森田三郎を支援する活動も、自由で楽しいものでありたい。

ともかく、選挙は面白かった。森田さんを支援してくださったたくさんの方々に、おそまきながら心からお礼を申し上げ、今後よろしくお願ひいたします。

これからの活動と四年後の選挙をぜひ一緒に楽しみましょう。新しい仲間の参加を呼びかけます。

毎週日曜日、午後二時ごろから五時ごろまで、谷津干潟の南側の葦小屋のあたりで、ゴミを拾ったり、鳥を見たりしています。夏の夕方の谷津干潟の風は涼しくていい気持ちです。

終わりに、今度の選挙で森田三郎を支援してくださった全ての方々、子供たち、干潟の生き物たちに心からのお礼を申し上げます。ありがとうございました。



市議会議員選挙費用報告書

摘要	金額	備考
交通費	34,920	ガソリン代他
印刷費	78,000	ポスター 500枚
広告費	80,252	スピーカーリース料, 看板用ベニヤ
食糧費	70,650	昼食, 夕食材料
雑費	6,740	ビニルクロス, コピー他
合計	270,562	

※ 皆様のご協力により、人件費は一切かかりませんでした。

※ 多くの方々から暖かいカンパをいただき、ありがとうございました。今後、「ふかんど通信」発行費用、清掃用ゴミ袋代等に充当させていただきます。



楽園の子供達

6 絵と文 森田三郎

「オンジョいよー」の呼び声

オンジョとは、ギンヤンマのことである。20年以上も前のこと、谷津干潟のちかくでは、子供たちはもちろん、皆んなそう呼んでいた。

オンジョは、沼や田んぼ、野はらや小川が大好きである。谷津干潟がまだ「ふかんど」と呼ばれていた頃には、そういう後背地がたぐさんあった。そこはまた、昆虫や魚たちがにぎやかに生きている。すばらしい天国だった。もちろんそこには、ぼくたち子供の生きた教室でもあり、たのしい遊び場だった。

しかし今は、ゴミを捨てられ、みんな消滅してしまった。それが文化的生活の悲しい答えだった。

オンジョを呼ぶ子供たち

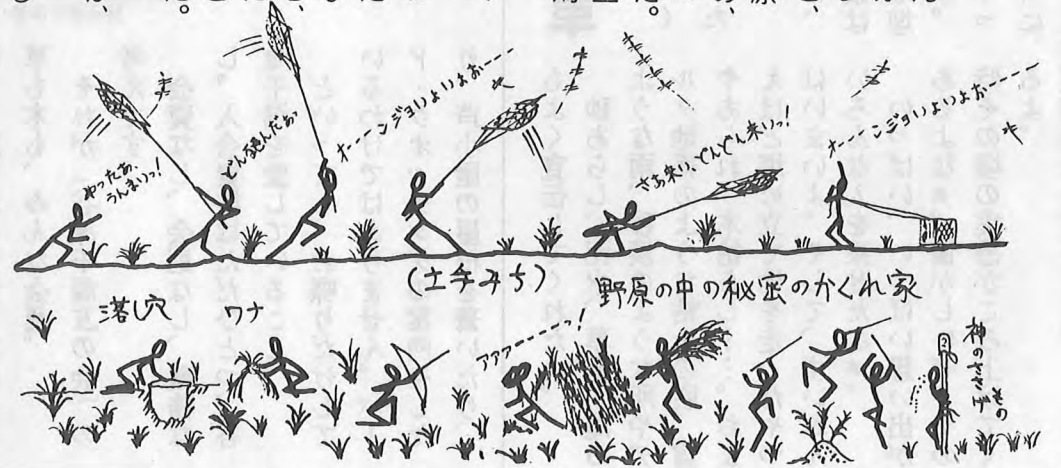
夏だった。晴れた、風のない日だった。房州の山々が霞んでいる遠い干潟の沖から、オンジョたちがとんで来るのだった。それはは

じめ、黒い小さな点のように見えた。干潟の上を低くとんで来るオンジョは、グングンこっちに近づいて来て、土手道を「ヒョイ」と、とび越えるようにして、沼や野原へと散っていった。うちの近くの木の梢にもオンジョたちがいっぱいまとって、羽根を休めていた。

オンジョ網をかついで土手の上に立ったぼくたちは、はるか干潟の沖を見つめながら「うーん、オオンジョ、いよいよおーい」と。その意味は、「オーイ、オンジョたちよ、みんなとんで来いよお、オレたちは待ってるんだぞおーっ」ということだった。子供だったぼく達は、そう呼んだら、その呼び声に連れられて、ほんとにオンジョたちが、こっちの方にとんで来ると思っていたのであった。

夏の日差しを浴びて、はだしの、日やけた子供たちのそんな姿が、土手みちや沼や野はらにあった。つがいもあつたし、ぼくは五匹も

子供は「小さな大人」ではない。子供は、「遊びのかたまり」である。大人の考えている遊びは、子供にとっての遊びのソレではない。いったい、子供の誰が、自然と触れ合おうとか、価値あることをしようとか、位置づけや理論をごねあげる



連らなっているのを見たことがある。カキ大将の中には、七匹も連ながっているのを見たものもいた。そんなのは、ちよつと、ムカデが空をとんで行くようだった。夏の夕方、沼の上空を、ものすごいオンジョの大群が、影をつくってぶつかりながらとんでいることもあった。

オンジョのほかには、ドロボー（オニヤンマ）、ヒラキ（ウチワトンボ）もいた。

子供たちは、誰でも「秘密のかくれ家」を持ちたがる本能がある。手づくりの、粗末なもの。しかしそれは、苦心の、一生懸命のものである。私たちの場合、それが、野はらの中にあつた。ムツとする草いきれの、夏草でつくった。それでぼくたちは、土人やターザンになったつもりでいた。おとし穴や草のワナは、守るためのもの。カキ大将に教わり、やがて又、年下のものに伝えた。

お詫び
「ふかんど通信」第六号が一部の地域当方の手違いにより配布出来ませんでした。お詫び申し上げます。

発行 谷津干潟友の会
〒275 習志野市谷津3-25-11
TEL.0474-51-5044
編集人 大滝俊隆

ふかんど通信

子供は遊びの“天才”



子供は「小さな大人」ではない。子供は、「遊びのかたまり」である。大人の考えている遊びは、子供にとっての遊びのソレではない。いったい、子供の誰が、自然と触れ合おうとか、価値あることをしようとか、位置づけや理論をごねあげる

だろうか？
自然や環境破壊の最大の被害者は、実に子供達である。そして彼らには、その抵抗力もなければ、弁明する手段もない。社会的に意欲表明する方法も能力もない。しかし、ゆっくりと確実に、心身なる人間形勢という形をもって、その答えを築き上げてゆく。

だが、その答えが、目に見え、大人が問題として分かる時には、すでに手遅れであるし、直しが効かないのである。

過日、海なし県埼玉の三郷から子供たちが干潟に来た。

この子供達も、初めは恐る恐る干潟に入り、歩いていった。スカートやズボンの汚れを気にしながらカニをつかまえていた。そのうち、こんなありさまになっていった。寝ころがり、はいずりまわり、笑いころげながら遊んでいるのであった。何の道具もなく、泥に浸り切って恍惚とさえていた。まさに子供は「遊びの天才」である。

遊びの「場」は奪われようと、遊びの資質は決して、奪いも、無くすることもできないのである。

文・森田三郎

干潟で過ごす日曜日の午後

「谷津干潟友の会」に入りませんか

秋の空が深く澄んで、今年も谷津干潟にユリカモメが白いスマートな姿を見せ始めました。間もなくたくさんのカモたちもやってきます。

バード・ウォッチングってやったことありますか？ 鳥を見るってことなんです。肉眼で見えるほど鳥が近くに寄ってくればいいんですけど、長年、人間にいじめられて警戒心が強くなっているの、遠くでしか見られないんですよ。

でも、双眼鏡や望遠鏡でのごと、びっくりするほど近くに見えるんですよ。きれいな羽の一枚一枚、えさのカニを捕まえたり、魚を食べたりする動作の、一つ一つまで。

谷津干潟には、カニやゴカイや魚が豊富です。それで、日本列島に沿ってシベリヤやアラスカと東南アジアの間を歩き来する渡り鳥たちの重要な補給基地になっていっています。

習志野市は、日本でも有数のバード・ウォッチングの場所だ。干潟は、数でも種類でも、首都圏一のシギやチドリを観察地だし、海浜霊園の方の東京湾には海の鳥がたくさん来ます。香澄に新しくできた公園の木々が大きくなれば、冬にはかなり多くの小鳥が見られるようになるでしょう。

バード・ウォッチングって、ちょっとおしゃれな趣味なんですよ。いま流行っていますよね。干潟の鳥は遠くにいますので、双眼鏡か望遠鏡があった方がいいんですが、なくても大丈夫。日曜日の午後、干潟の南側、湾岸道路の方の岸にある芦小屋のあたりに、「自由にご覧下さい」と書いてあるの、自由にご覧下さい。おいてあります。そばの芦小屋にはたいいてい「谷津干潟友の会」のメンバーがいますから、遠慮なく「あの白い鳥はなんですか？」などと尋ねて下さい。まず、望遠鏡で見える鳥の名を聞いてしまおうこと、それがバード・ウォッチング入門の早道です。



望遠鏡が用意してあります。自由にご覧下さい。



森田さんが干潟から引上げたゴミを運ぶ仲間達。

よく晴れた日曜日の午後、干潟の南側の芦小屋のベンチとテーブルのまわりで、十人ほどの人々がお茶を飲んだり、お菓子をつまんだりしながら、楽しそうに談笑しています。年齢はさ

まざま。二十歳台の青年、三十歳台の主婦、四十歳台のサラリーマン……。その中心にいつもいるのは、日焼けした顔に泥だらけの長靴をはいた、習志野市市会議員の森田三郎さん。

たあいもない世間話、干潟の鳥や生物の話、子供の教育について、習志野市政について、ときには、人生や恋愛について、干潟の風に吹かれながらおしゃべりしていると、一週間の疲れが吹き飛びます。

「谷津干潟が好きなのは、みんな会員」。いいえ、人だけじゃなく、鳥もカニも魚もゴカイも草も木も、みんな会員。

それが「谷津干潟友の会」の考えです。

会費なし、会則なし、義務なし。入会資格はただひとつ、谷津干潟を愛していること。

といっても、お喋りだけしてあるわけではありません。バード・ウォッチングの案内をしたり、芦小屋の屋根を葺いたり、



芦小屋の屋根葺の日、多勢の小学生が手伝いに来てくれました。

さらば我が愛車

「なあおまえ、よく走ってくれたなあ。ありがとう。疲れたろう。ご苦労様」

走行距離二十五万五千キロ。西は荒川河口の葛西から、東は花見川河口までのあの広大な埋め立て地。約三千ヘクタール。

こんなポロポロになっちゃって……。おまえのそのボディに描かれた絵は、「動く図鑑」として、「谷津干潟」という名が知られていなかった頃、とって

もよく宣伝してくれたよ。

砂あらし、泥水、草原、滝のような雨、砂漠のような所やデルタ地帯のような粘土の所、雪やあられ、木枯らし……。おまえほど埋め立て地を走ったやつはいまいよ。そして、ずいぶんいろんな人に乗せたなあ。いっぱい、いっぱい思い出があるよなあ。懐かしいぜ。その時その頃の実感がこみ上げてくるよ。

涙が出そうだよ……。京葉ホンドの小林大光さん、よく面倒見てくれた。ありがた

いことだ。

とうとう死の宣告が下されちゃった。クリーン作戦、ベンチや草地や小屋の保存。おまえ、その小さなボディで、ほんとうによくがんばったよなあ。

オレも、そして谷津干潟だって、おまえを決して忘れないぞ！

おまえとオレと谷津干潟は、いつも三位一体。保存運動の中で、おまえ、立派に大役を果たしたんだからな。

文責・森田三郎



ふかんど通信

発行 谷津干潟友の会

〒275 習志野市谷津3-25-11

TEL.0474-51-5044

編集人 大滝俊隆

楽園の子供達

7

広い干潟の見える大きな榎

絵と文 森田三郎

私の家の南側、海の方に向かって大きな榎が立っていた。まわりに木が生い茂り、小さな森になっていた。その森は、大南と呼ばれる強い南風や台風から、うちの屋根を防いでくれるのであった。子供の頃、夜、枕もとで「ゴーツゴーツ」というものすごい風の音や、すさまじい木の葉のざわめきを聞きながら、「榎は今、オレンチを守ってくれているんだな……」と思いつつ眠りに落ちた。

広い干潟の見える榎は、その中であってひととき大きく、高くそびえ立っていたのである。森の最先端にあり、長い年月にわたる海かぜのため、北の方にソリ返っていた。

登れば海が見えた、ひろーいひろーい干潟が水平線とともに、一望のもとに見わたせる。海は、夏の日着してキラキラと光り、まぶしくとてもきれいだ。沖には白帆が小さくなっている。青くかすんでいる房総

の山なみの上に、白く大きく、勇渾な入道がムクムクとおおいにぶさるように湧いていた。

榎の葉に顔をくすぐられ、葉と木の皮の匂いをクンクンとかきながら、サルのようにスルスルと登っていく。そして、高い枝にチヨコンと座って私は、よく海を、広い干潟を見ていた。そこには、もうしているだけで、なぜか、子供ごろをなくさぬ、満足させるものがあつた。

「危いから、三郎、榎には登るなよ」と、父と母から言われていた。見つけると、大声でおこりながら、物干ザオを持って追いかけて来た。そして、幹をガンガンたたいたり、葉の茂みをサオでガサガサさせるのであった。

そんな榎にも、公然と登っている時があつた。それは、うち中、あるいは近所の人達といっしょに海へ貝をとりに行く時であつた。母は言った、「三郎っ、お前ご飯たべたら、木に登って海を見て来い

やあ」と。その時は、私の心は勇立っていた。ガツガツと朝メシをすませ、立ち上りながらチャワンとハシを置き、「かあちゃん！オレえ、木に登って海、潮

おー見てくんねえーっ」と。裸足のまま、縁側から外へポーンとすっ飛び出て、榎まで走ってゆく。かつて知った榎のこと、幹に手と足の音をピタピタさせて、それは身軽な素早いものだった。

高い榎の茂みの中から、身をのり出し、海を見た。ひろい、ほんとうにひろーい干潟を。そして今度は、家の方、下に向かって叫んだ、「かあちゃん……ん、うみいいいよ……、潮おー、ちゃんといよ……」と。何度も何度も、からだ全体から声をはり上げて叫んだ。私は得意だった。「オレが榎に登ることが、役に立っているんだ！」、そんな思でいっぱいだった……。



かあちゃんーん
潮が引いたよー

おーい、海行くよー

大きな榎にのびて、潮の具合を見た。そして家の方に向かって、大声で「呼んだり、合図をしました。」

~~~~~

## 謹賀新年

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



谷津干潟 1988年1月2日

## カモメ・コミュニティ

森田三郎

「ナイス・キャッチ！」  
今は誰がやっても、ユリカモメが空中でパンのミミをくわえてゆく。こっちを見ながら飛んできて、おねだりするように頭と首をねじ曲げる。そして、ホント、目と目が、視線が合うのである。

こうなるまでに約七年。同じ時間に、同じ所で、同じ人間が、同じ服装で。雨や雪や、木枯らしの吹きすさぶ日も、毎日、また毎日、パンのミミをもらいにパン屋さんに通った。

初めは、人が現場に立っただけで鳥は遠くへ逃げて行ってしまった。やがて二、三羽、私が帰ると食べに来た。次に、そこにいても、でも、私のしか食べに来なかった。だんだん近くで食べるようになり、カモもおそろおそろ……。今は、子供、ご老人、お母さんが主役である。いろんな人が来てパンを投げる。

餌づけの賛否両論、私も承知している。が、私は評論家でも観察者でもない。谷津干潟を知ってほしかった。大事にして、守り、育ててもらいたい。危害さえ加えなければ、いつでも、鳥と人がふれ合えるということを実証したかったのである。今、人の手から直接パンを取っていくように……。秋、ユリカモメが訪れる頃になると、長年ともに餌づけをしてきたひとが言う。「わたし、シベリアにたくさんお友だちがいるのよ。またそろそろやって来るわ」。



# ふかんど広場

## 大好きな谷津干潟

谷津七丁目 吉田 佳代  
(谷津小五年)

「ワーン、くつがとれないよー」。  
私は、初めて干潟に入って、ゴミを拾いました。森田さんのお話をきいたり、上からみている干潟とは全くちがっていました。きれいにみえている干潟も、本当は、まだまだ小さなゴミがあったり、歩きやすそうにみえる干潟も、本当は、ドロドロだった。そして、私も、長くつぐらいじゃおいつけないくらいドロの中に足がズボズボ入ってしまいました。でもぜんぜん、きたないという気持ちはおこりません。なんだか、とっても楽しい気分になってしまいました。そして、この日から、どんな干潟が好きになってきました。干潟に行けば、鳥たちにも会えるし、やさしいおとなの人にも会えます。

干潟は行けば行くほど楽しいところ。風がつよくて冷たくても、鳥にパンを投げれば寒さもわすれるし、あつくてバテそうな夏も、あし小屋に入ればすずしい風がふいてくるし……。私はこんな干潟が大、大好きです。そして、こんなに、大切な場所を、のこそうとがんばってくれた森田さんや、やさしいおばさん、おじさんたちも大好きです。

このごろ、学校がいそがしくて干潟に出かける回数がへりましたが、またパンをもって、鳥たちに会いに行きつくりです。

### 秘密の場所

袖ヶ浦三丁目上 岡 裕子  
(主婦)

海は……。

一人になりたい時にながめるもの。誰にも会いたくないと思っ行って行くところ。

けれど、一時間もすると誰かに会わないかとソワソワするところ。いつも私達の心をいやしてくるのは自分の好きな場所。そんな場所を持つている人は幸せだ。いやな事があった時、うれしい時、そこへ行けばほっとするのだから。それが友人の家であったり、押し入れの中であったり、神社の裏の大きな木の下のあたり……。

子供の心の中も、いつも人に話せることばかりではないだろう。きっと一人の心の中にたたくている秘密やうまく言葉で表せない思いがある。秘密、って言うときぐ悪いことと思いがちだけれど、自分だけの思い、とても言いかえようか。秘密は子供を思慮深くする。自分の心の中をじっくりと見つめて考える時間を作る。そして、それは一人の人間として自立の第一歩かもしれない。

私達大人もかつてはそんな思いを漠として抱き、自分の「秘密の場所」を作ってきた。能率よく生活することにストップをかけてばんやりとする時間を思い出してみよう。子供は大人が考えている以上に、その小さな体の中に大きな宇宙を持っているのだから。  
私はいつも海で子供に戻る。



## 谷津「ひかる」

### 干潟の子

千葉市 板橋 博  
(タクシードライバー)

ここ谷津干潟の生き物は皆友達だ。卵から孵って何ヶ月目かの穏やかな日和、突然名前をつけられた。なぜか、その名は「ひかる」……。

人間たちから見ると「アヒル」らしい。アヒルとカモのあいの子だけれども、自分は確かに「アヒル」、姿、色、動作……、仲間と変わっているとは思わない。

毎日、人間たちがエサ(パンクズ)を与えてくれる。他の鳥たちは要領よくエサを取るが、自分も一生懸命なのに、ウロウロするばかりでエサにありつけない。仲間と行動しても、すぐ列から脱線するらしい。

だから、人間たちには、愛嬌があって、コッケイに映るのかな……。この干潟の鳥の群れの中では、ヒトキワ目立つのかな……。でも、愛情(同情?)らしく

「ひかる」と、優しく声をかけてそっとエサを目の前に与えてくれる。今では「ひかる」を大切に。紺碧の空の下

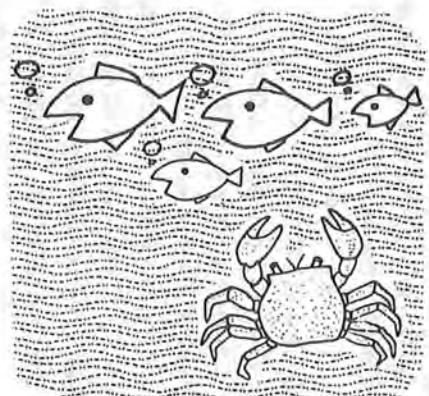
きょうも、元気で仲間(群れ)と干潟で「ひかる」ってます!!

## 谷津干潟のスケッチ

谷津五丁目 山岸 弘夫  
(二隠居さん)

四季の移り変わりにつれて、いろいろな表情を見せてくれる谷津干潟。いつ見ても見飽きないけれど、北風が吹きはじめ、水が澄んでくる頃は、なんととっても一年のうちでもハイライトだ。

人々が投げ与えるパンのミミを道ってユリカモメの白い姿が空中で乱



舞する。水面にはオナガガモ、ヒドリガモがひしめき合って餌に殺到する。ひと切れのパンを介して人と鳥との間に気持ちを通いあう。初めてこの光景に接した人は思わず歓声をあげる。犬まで柵のすきまに首を突っ込んで見物する。

これだけでも一見に値するのだが、わが谷津干潟の魅力はまだ奥深いのだ。朝夕にはシギ、チドリの大群が大空に幻想的な渦巻きを描いてくれる。岸伝いに歩けばカルガモ、ハシビロガモ、オカヨシガモ、マガモが思い思いに泳いだり居眠りしたりしている。コガモの如きは岸辺の足元近くでベチャベチャ餌を探っていて、こちらと視線が合ってお互いにピツクリしたりする。

何となく気になる存在はダイシヤクシギだ。今年は四羽が越冬している。北風がビュービュー吹きすさぶ日に浅瀬で、一本足で風に向かってじっと立っている姿は何とも詩的である。何を考えているのだろうか。毎年姿を変えてゆく谷津の風景のことだろうか。それとも去年の夏過ぎたシベリヤの大湿原の夢でも見ているのか。市街地に囲まれた水辺でこの鳥の越冬が見られるという事も、谷津干潟のセールス・ポイントのひとつである。

「ふかんど広場」は皆んなの広場です。谷津干潟に想うことや、身近に起った出来事などなんでもかまいません。どしどしお便り下さい。原稿用紙2枚以内(800字)でお願いします。

## 新春随想

冬の谷津干潟は、空は青く澄みわたり、水も透明で、一年中で最も美しい。遠くシベリヤ大陸から渡ってきた数千羽の「ユリカモメ」の羽根が冬の陽光に白くまぶしく輝き、厳しい寒さの中にも華やきがある。

ここは東京湾の一部である。東京湾はいま、臨海部でさまざまな開発構想計画が、私たち一般市民は戸惑う程の早さですすまされようとしている。廃棄物の処分地である「フェニックス計画」や「東京国際空港の沖合移転拡張計画」や「東京湾横断橋」の建設や人工島に首都機能を移転す

## この自然を21世紀へ美しく残したい

ふかんど通信編集部  
大滝 俊隆

るといふ「東京コスモポリス構想」など国の大規模な計画から、自治体レベルの計画まで目白押しである。狭い日本のこと、埋立地や海上の空間を高率に利用するのは、結構なことなのだが、ここで考えなければいけない事は、僅かに残されている東京湾の自然と人との調和と共存ではないだろうか。

過去百年にわたって緑地や海を乱開発してきたツケは今、私たちに廻ってきている。二度と人間の手で造ることのできない自然をたくさん失なってしまう。

谷津干潟の面積は、およそ日比谷

公園の二倍の広さである。十数年前は悪臭を放つゴミの山、水や泥も腐りきっていた。生き物の姿も消えていた。森田三郎さんは、干潟に立って驚いてしまったという。子供の頃カニや魚と遊んだ想い出の干潟はほとんど埋め立てられ、住宅地や工業用地になっていった。嘆き悲しんだ彼は、昔の干潟を取り戻そうと、汚泥に身を投じ、黙々とゴミを拾い続けた。変人扱いされた。会社をやめ、日中に時間がとれる新聞店員になって、彼は続けた。

変人扱いしていた近所の主婦の中から一人、二人と理解者がでてきた。

お茶や弁当を差し入れてくれる人も現れた。彼のパワーと応援を続けてくれた人たちの努力によって、埋め立て計画に入っていた干潟が奇跡的に残ったのである。ユリカモメやシギが舞い、カモが群れ、トビハゼやボラが泳ぎ、夏になると数百万のカニが群れる干潟は私たちの宝だと思ふ。今では、クリーン作戦の輪も広がり、毎週日曜日の午後からおこなっている。この自然がギッシリ詰まった貴重な谷津干潟を、二十一世紀の子供達へ美しく残すのが、私の夢である。



# 楽園の子供達

8 絵と文 森田三郎

## 風車

沼のほとりに立っていた。たしか、六〜七台あった。みんな南のほう、海に向かって立っていた。谷津干潟のほうから、やわらかい潮風が吹くと、それを受けて、みんないっせいに「カラカラ」と、音を立てて回っていた。

風車は、沼から田んぼへ水を汲むためのものであった。農家の人が作った、無骨な、フシや木目が古くなって、少しくたびれた風車は、回るたびに「ギーギー」と鳴っていた。

私がつとも鮮やかに憶えているのは、ちょうど今ごろから、初夏にかけてのありさまである。新緑の田んぼが波打ち、風車のすぐ下、こんもり茂るヨシやガマガ、力強く育ってゆく。その水の、茎の所には、オタマジャク

シヤザリガニ、ヤゴなどが、じつとして休んでいるか、モゾモゾ動きまわるのが見えるのだ。沼の水の中には水草が、水面には浮き草がたくさんあって、水の生き物たちにとっては素晴らしい楽園だった。沼の中を透かすようにして

見ると、水草がジャングルみたいに見える。水がキラキラと光っている。ウシガエルやトノサマガエル、アカガエルたちが、まわる風車が映っている、あつたかそんな沼の表面に鼻づらを

出し、手足をデレツとのぼしてポツカリと、あちこちに浮んでいた。「オオーイ、こつちだあこつちだあー、魚がえつぺいんどあー、早く来いよあー」と、はだしん坊の、泥だらけの子供たちの呼びかわす声が、沼の水面に反射するかのよう



「ヒヒヒーン」といえないで、馬が、風車と反対がわの沼の土手道を歩いてゆく。ヒバリたちもゆっくり回りながら、力強くさえずり、だんだんと上へ、空へのぼっていった。

原っぱから、ソーツと風車の下へはって行き、そして、「パツ」と身を動かす。すると、今までそこいらでのんびりとしていた、沼の生き物たちが、「サーツ」と水中にその姿をかくしてしまっているのであつた。浮いた木の上で昼寝をしていたカメも、バタバタ手足を動かして水に入ってしまった。カエルも三匹ぐらい、水音をたてて飛び込んだ。

そんな中で、風車は、初夏の、潮の香と水の匂い、草の匂いを、運んで来る風を受けて、「ギーートン・ジャー、ギーートン・ジャー」と、緑の波打つ田んぼへ水を汲んでいた。

風車のまわりには、菜の花畑や麦畑、野原や小川、アシ原や砂場、そして水車もあった。沼のわき、風車のすぐうしろの、ウマゴヤシの原っぱに、ぼくたちは寝ころがった。白い雲がゆっくりと、漂い流れ、青い空の中で、時々くつたりしては、又はなれていった。

発行 谷津干潟友の会  
〒275 習志野市谷津3-25-11  
TEL.0474-51-5044  
編集人 大 滝 俊 隆

# ふかんど通信



一つ積んでは父のため  
二つ積んでは母のため  
崩すは童の石なれど  
積みゆく思念は崩されじ……

最初に、行動があつた。独りだった。素手だった。始めなければ、始まらないと思つた。いつ、きれいになるか、わからなかつた。拾い集めたゴミがどうなるか、当てる何もなかつた。谷津干潟がきれいになつても、保存される保証もなかつた。でも、いいと思つた。干潟の身になって、ゴミやヘドロになりきろうと思つた。汚いと思つのは、それらを相手として違和感があるからだと思つた。

人が私をどう思つかよりも、私が、ふるさとの干潟に何ができるかと思つた。そのほうが大切だつた。評価や、判断や、意見は、人様のもの、世間から与えられたもの。与えられたものならば、やがてはお返しするもの。人が自分をどう思つかとが、ゴミを拾うのが恥ずかしい

とか、そう思うのが恥ずかしかつた。それは、谷津干潟に對してすまないと思つた。そんな自分がくやしかつた。くやしくて、くやしくて、ある憤りと涙が込み上げてきた。心身の奥底から、地熱のような、ドロドロとした熱い力のようなものが込み上げてきた。想い、念じ、かり立て、つき動かすものは、胸の奥から芽生ゆる、「あの幻」である。それは、私たちの心に、新しい地平線、を垣間見るものである。つまづき、まるびつ、見え隠れするも、ダイナモとなりて突き進んでゆくもの。「有能の前に神々は汗を流した」「我々が織り始めれば、神様が糸を出してくださる」とは、かくの如きものか……

森田三郎



谷津干潟クワリーン作戦

200回目を迎える





袖ヶ浦一丁目 宮入 黎子 (詩人)

### 引き潮

ビルに囲まれた干潟は 旅鳥たちのオアシス

引き潮になると

フラゲは 白い月となり

ボラは シャンプシながら いそいで 海へ帰ってゆく

干潟の水は

怪物が飲み干すように引き

三日月形の砂地が 浮かび上がってくる

コリカモメやシギが 次々と着水

引き潮にさわく 小動物をつかまえる

三日月形の砂地は 半月となり

白銀の食卓となり

朝の光の中に 輝いている

\* \* \*

二月の土曜日の午後、森田三郎氏が谷津干潟の砂地に下り立ってゴミ拾いをしていました。

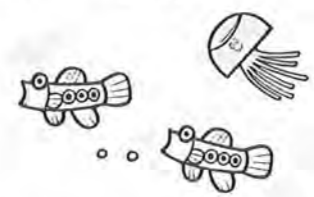
「ご苦労さま。きれいになりましたねえ」

「いや、拾っても拾ってもという感じですが、表面にビタリとくっついているゴミがなくて。これじゃ微生物が育ちませんからね」

干潟を皮膚感覚でとらえている森田氏の言葉に感動した。だからこそ、干潟がよみがえり、渡り鳥の楽園になっているのだ。

また、周辺に住む私たちも、朝夕の干潟の景観にどんなに心安らぐことか――。

子どもたちと干潟の岸に立って、いきものたちの食物連鎖や体重わずか二五グラムのシギが春秋、片道一万キロの旅をするエネルギーを知っておどろく。干潟は、日々発見の場であり、生きた教育環境としてすばらしい。



## ご案内

### 大滝俊隆写真展

# 小さな干潟の物語

森田さんのクリーン作戦を手伝いながら過去2年半の間に撮影したものです。谷津干潟に遊びに来る家族づれや、泥んこ遊びの子供達、四季の風景など、モノクロで全紙60点を展示いたします。5月は沢山の渡り鳥たちが羽根を休めています。干潟でのんびりと一日を過ごしませんか。ご高覧いただければ幸いです。



■会期/1988年5月1日・5日・8日・15日・22日・29日  
AM10:00~PM4:30 (雨天の場合は中止とさせていただきます)  
■会場/谷津干潟南側芦小屋附近

人柄にーたー奉仕の主婦 ぬたり

あつちの手仕事はかゆくてゆい

びろーどの妙き羽がやみつかせら

吾手のパンをけはて飛ぶかふ

七年り月日を重ぬ海鳥り

ちりるパン食むまかにけりたうと

佐倉市 須藤まさ

「市内在住K生」さんから詩と短歌が寄せられました。

### 野鳥の楽園

一、ここは習志野 谷津干潟

パンをちぎって投げやれば

飛んで来る来るユリカモメ

餌を求めて われ先に

乱舞さえずり 空に舞う

(二、略)

三、ああこの干潟 楽園は

言うに言われぬ 歴史あり

奮闘努力 忍耐の

苦難を越えて 尽力の

一語につきる 賜物よ

(四、略)

五、朝日夕日 葦のかけ

眠りこけるか 鳥の群れ

さわやか風に 起つ鳥の

声ものどかに 思うらん

自然の楽園 いつまでも

野鳥の楽園 いつまでも

羽休む越冬鳥のかわゆさよ

パン切れやれば飛び交い来る

成せば成る この諺も今は生く

見よや干潟の今の姿を

いつまでも憩いの場所と

清き環境つくりてしかな

人の来る

(昭和六十三年二月二十七日)

## 谷津干潟の仲間達 1

### 鳥



オオソリハシシギ(シギ科)  
形41cm。茶灰色で大型、くちばしが長く、上にそりかえって、ピンク色で先の半分が黒い。足は体に比べ短めで黒い。夏羽は全身赤褐色で、背面は黒い斑があり、腰と尾羽は白い。



ダイシャクシギ(シギ科)  
形60cm。コサギぐらいの大きさになる大型のシギ。長くて下に曲ったくちばしを持ち、全身が茶色味がかつた淡灰褐色で、暗褐色の斑が並んでいる。腰と尾羽が白い。足は青味のある灰色。

### 花



からすのえんどう(まめ科)  
茎はつるになり長さは60cm~90cmくらい、葉の先のまきひげでほかの物にまきつく。果実は中に10ほどの種子ができる。

しろつめくさ(クローバー)(まめ科)  
花の茎は高さ20cm~30cmくらい。茎は地面をはってのびる。三枚葉で花の下には葉がない。

名前の由来  
江戸時代、外国からの貴重なガラス器を船で運ぶときに、この花を乾燥させたものをクッションがわりに詰めていたため、白い詰めものの草でしろつめ草という名がついたそうです。けっして白瓜草ではありません。

## 谷津干潟クリーン作戦二百回

あなたも、いかがですか。

谷津干潟をよみがえらせようと、さる五十五年から始めた谷津干潟愛護研究会(森田三郎会長)・谷津干潟友の会(長塚進吉会長)・谷津干潟環境美化委員会の「谷津干潟クリーン作戦」が二百回目を迎えます。五月十五日(日曜日)午後一時、干潟南側の芦小屋前に集合して行われます。作業のあとは豚汁パーティーも予定しています。一般の方の参加をお待ちしております。



# ふかんど通信

発行 谷津干潟友の会  
習志野市谷津3-25-11  
TEL.0474-51-5044  
編集人 大滝俊隆



## 楽園の子供達 9

網曳きじいさん 絵と文 森田三郎

今から三十年くらい前のこと。谷津干潟の近く、少し沖の方へ行つたあたりで網を曳く、ひとりのじいさんがいた。そのじいさんは、キセルをふかしながら、麦わら帽子をかぶっていた。そして、ゆつくりゆつくりと、のんびりと、たつたひとりつきりて網を曳いていた。そのじいさんをほく達は「網曳きじいさん」、そう呼んでいた。

海へ出るには、銀色にひかる砂道があった。コラコラとかけろうがのぼり、真夏の太陽で砂道はとてもまぶしかった。

「フカツカツ」と裸足で歩いてゆく、赤銅色に焼けた干潟の子供たち。サラサラした砂道になればもぐりそうな足の指の間からは、砂とホコリが、シコウツシコウツと噴き上げるのだった。砂道のすつと先には、キラキラひかる海がちよつと見えていて、かけろうでゆれていた。

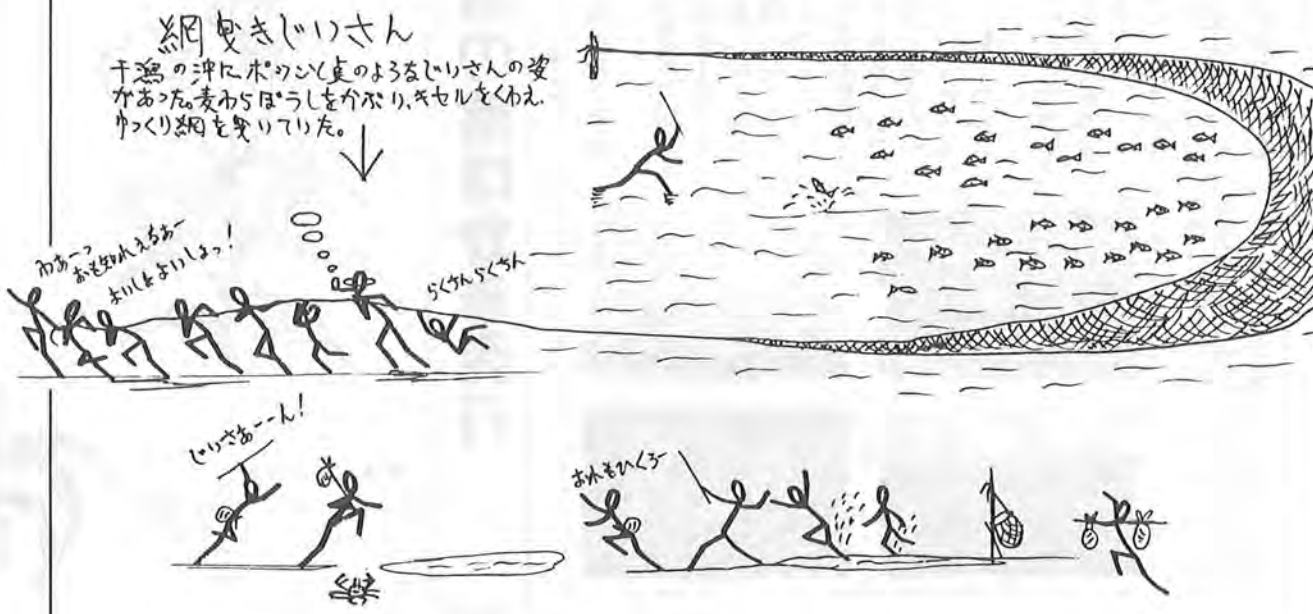
松と夏草と水の匂いが、いれかわりじつじつと入ってくるのだった。右側は浜辺だった。海草がぶ厚く積もっていて、その中を歩くのは又ルルとして気が悪かった。「あーちつち」と言いながら、ほく達は、草の上や水たまりの中へ走つていっては足を冷した。それほど銀色の砂道の砂はとつても熱かったのだ。それを何回もくり返しながら、海へ、沖へと歩いて行つた。

あともう少しで海に——といつところまで来ると、ほく達は「わあーい、うみだあうみだあおーい」と叫びながら、いっせいに、くるつたよりにかけていった。焼けた砂もかまうこつちやない。足の下からは砂が舞い上つた。

海へ出ると、とだんに視野がワイドスクリーンのように広がつた。胸に空気がいっぱい入ってくるよつた。そんな時は、大人も子供も、自然と大声をほりあげたくなつてしまつたのだ。強い潮の香りと海草の匂いで、身も心も躍動せずにはおかなかつた。「キャッホーキャアホー！」と叫びながら、ほく達は広い干潟の中を、きちがいのようにかきまわつた。そして、沖へ沖へと出ていった。その沖のただ中に、白い大きな入道雲の下に、ボツンと点のように、じいさんの姿があった。じいさん目ざして、ほく達は大人のように、また、背よりも高く水しぶきを上げてかけていった。近づいて、「じいさあーん！」と言つた。「来たな、ガキめらあ」と言つた。そこにいっしょに網を曳かせてもらうのだった。

固い網と潮の匂いは、子供の心と体をかきたてるものがあつた。じいさんが、「あつ、すげえな、すげえな」と言つた。なおも力一杯網を曳くのだった。曳き終わると、スヌメの子みだいに並んで、両手をおわんのようにして差し出した。手の中へ、じいさんが銀りん踊る魚を分けてくれた。その銀りんの輝きと、手の感触と、顔にかかる滴は今でも憶えている。

もうつた魚は、潮だまりでつくつた、ほく達の「魚の水族館」に放してやつた。そして貝ガラや砂や海草などで「魚のおうち」をこさえてあげた。その中へは、また、カニや貝、ヤドカリやイソギンチャクやウミホウスギなど、取れるものは何でも入れてやつた。そうすれば、きつこ魚も淋しかないと、子供のほく達は思っていたのだ。



網曳きじいさん  
干潟の沖にボツンと点のようじいさんの姿があつた。麦わらぼうしをかぶり、キセルをくわえ、ゆつくり網を曳っていた。

### 谷津干潟が 国設鳥獣保護区指定へ

この秋

森田三郎

「ぼくたちの谷津干潟を守ってくれて、ありがとう」。谷津南小の子供たちが言ってくれた。

皆さん、子供たちがね、言つたんですよ、ぼくたちの谷津干潟、って……。

そう、ぼくたちのなんだ、そうだねえ……。このひと言ですべてがむくわれました。このひと言、長かったあ、聞きたかつた。よくぞ言ってくれた。ありがとう、子供たちよ、お礼を言いたいのはこちのほうだ。

昭和五十八年秋に環境庁が、公害防止事業団の事業計画として、「東関東自動車道の騒音緩衝緑地整備事業の中に谷津干潟も含める」と発表して以来、実に四年半……。最終管理者を国にするのか、県にするのか、それとも習志野市にするのか。大蔵省の所有である干潟（水面の部分）を、どこに所管替えするか。環境庁か、建設省か。有償か、無償か……。それらをめぐって二転、三転。やっと、この五月、一番大きなネックであった所管替えが、「国設

鳥獣保護区指定用地」として「無償で、環境庁へ」と決定した。秋には国設鳥獣保護区に指定される予定で、もうすでに公害防止事業団では干潟の水質調査に取りかかっている。今年度中に基礎調査を終え、六十四年四月から工事に着手、六十六年三月には完成の予定である。

これで、谷津干潟は埋め立てられずにすむのだ。ホントに生き残れることになった。鳥や、カニや、ゴカイや、みんなのやすらぎの場として……。鳥は、観察されるために干潟に来るのではない。立派な観察舎があるから来るのでもない。望遠鏡があるから来るのでもない。生き物が棲みやすい環境であれば、そこに生き物は集まる。干潟の浄化に大活躍しているカニやゴカイのお手伝いをしながら、その自然の営みを、美しい鳥の姿を、私たち人間はそつと見せてもらおう。



# エッ!! 干潟にインターチェンジ?

谷津干潟沿いの東関東自動車道にインターチェンジができそうだという噂が耳に入りました。そんなばかな! すぐそばに習志野インターがあるのに、誰が一体何の必要があってそんなことを考えたのかしら、というわけで、噂の真偽を確かめるべく、県の葛南土木事務所を訪ねて、担当の課長さんから事情を伺いました。判明したことを整理すると、次のようになります。

設置位置については、船橋市内敷カ所について比較検討しているが、隣接している習志野市に設ける案もあるとのことでした。船橋市内では用地的に困難が予想されるうえ、広域交通を受け持つべき幹線街路がないので、習志野市の谷津干潟付近が本命になりそうな気がしています。

どうやら噂は、根も葉もある噂放っておいたら煙も火も吹き上げそうな噂だったのです。

次に、このインターチェンジは請願インターだということですが、道路公園が計画したものと異なり費用は地元が負担して公園に造ってもらうインターチェンジなのです。つまり、東関東自動車道の本来的役割からは不必要なものなのです。

干潟及び周辺の公園整備やインターチェンジ計画について皆様のご意見を「ふかんど通信」編集部までお寄せ下さい。



## ふかんど広場

### 「第2百回クリーン作戦」に参加して

ボーイスカウト船橋第22団  
カブスカウト副隊長  
柳池 知子



谷津干潟クリーン作戦に参加している近所の子供達と話をしました。男の子達の一組は、休みのときは時々干潟に来てゴミを集めるのだそうで、サーフボードの扱いも手なれたもので、ずいぶん遠くまで行って、ゴミ袋にいっぱいゴミを集めてきました。女の子達の一組は、学校から干潟の勉強に来たことがきっかけでゴミ拾いをするようにになり、その日もチラシを見て来た、と話してくれました。

「森田さんのことを知ったから私達はもうゴミを捨てないんだ!」という言葉をとても力強く感じました。きっと近所の方達は、干潟が美しく変わっていく様子、森田さんのご努力を見て、ゴミ拾いの協力はできないまでも、ゴミを捨てない協力を惜しみなくしておられるのではないかと思います。

私は、森田さんたちのなさっていることを知り、人間って本当に素晴らしいなと思います。初めは本当に小さな小さな光でも、少しずつ、少しずつ人の心を動かし、その分だけ干潟を美しくしていったのでしょ。野鳥の集まり、魚の集まりは、人の善意の集まり、そして干潟の輝きは、人の心の輝きに見えました。

この干潟は、あきらめないで頑張る、生きる勇気を与えてくれます。私は今回のクリーン作戦に参加して、人間はこんなに素晴らしいんだもの、世界はきっと平和になるに違いないと、うれしく確信しました。(船橋市在住)

### やつひがた

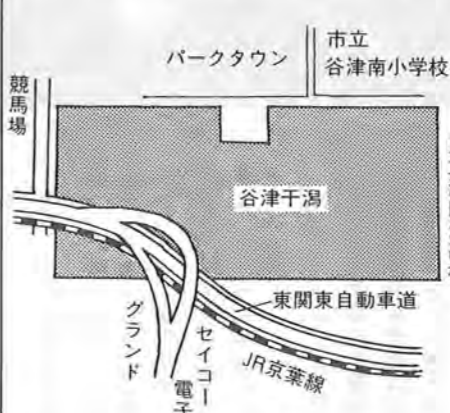
ボーイスカウト船橋第22団  
カブスカウト隊  
北村 健二

ひがたに行きました。はじめはゴミひろいをしました。ゴとか木がいっぱいありました。ほくはそのゴミを出さないようにちゅういします。ゴミひろいをしてから、カニとか貝とかひろいました。カニは小さいのしかいませんでした。貝は黒いのと白いのとおちていました。お屋をたべました。おにぎりはおいしかったです。お屋をたべてからまたカニをとりに行きました。そのところは小さいのと中くらいのがたくさんいました。

かえってきってから、サーフボードを出してもらって、のっているいろなところへ行って楽しかったです。(船橋・坪井小三年)

もし谷津干潟にインターチェンジが設けられたとしたら、それは一体どのような幾何学的な形態になるのでしょうか。

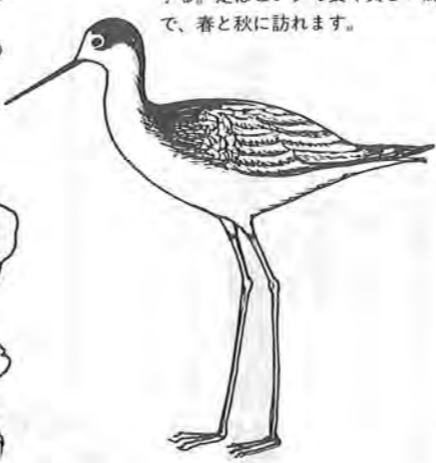
県としては、まだ作業途中なのではっきりしたことは示せないというところで、言葉による説明を聞いたのですが、それによると、セイコー電子の工場とグラランドの道路からランプを造り、船橋方



面にカーブさせて京葉線と高架道路をまたぎながら本線に交流するというもので、箱崎や辰己のインターチェンジを連想させる大がかりなものと思われま。当日は、正確な情報を知るための取材が目的だったのですが、説明を聞いているうちに心配になってきました。わずかに二キロほどのところに二カ所もインターチェンジを造って、習志野市としてどんなメリットがあるのだろうか。デメリットだけではないだろうか。幾つかの案を作って比較検討するのは良いことですが、評価基準の考え次第で案の優劣が左右されることがあるので、県として充分客観的に検討して、いやくも船橋市の要求する施設を習志野市に押しつけるとか、干潟をさらに埋め立てるような案を具体化するごとのないよう注意を促してまいりました。 山岸 弘夫

## 谷津干潟の仲間達 2

▼セイタカシギ  
ヨーロッパやアジアの中部で繁殖する。足はピンクで長く美しい鳥で、春と秋に訪れます。



▼おおもまつよいぐさ  
(あかばな科)  
茎の高さは1.5mくらい。花は黄色で夕方開化し朝になるとしぼむ。名前は夕方をまって咲く草という意味があります。



▶あしはらガニ  
甲の幅が4cmほどで海岸の湿地帯土にあなをあけて住んでいます。

## 谷津干潟の絵はがき発行

谷津干潟友の会ではこのほど、「谷津干潟の鳥」の絵はがきを発行しました。

この秋に国設鳥獣保護区に指定されることになった谷津干潟ですが、これまで谷津干潟に関するパンフレットとか、資料らしいものはほとんどありませんでした。干潟の整備はいまの習志野市で最大のプロジェクトであるというのに、世界でも有数の干潟だというのに、市内に住んでいてさえ知らない人が多いことに驚かされます。

そこで、谷津干潟のPRのため、クリーン作戦二百回を機に絵はがきを発行したものです。今回はその第一弾で、ダイサギ、ハマシギ、コアジサシ、セイタカシギ、黒鳥のカラー五枚組で、今後、第二、第三弾と続けて発行の予定です。



お問い合わせは、  
谷津干潟友の会または山岸弘夫まで。  
習志野市谷津3-29-4-307  
0474-54-3028